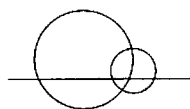


〈論文〉



## 書院生のフルンボイルにおける調査旅行

東亜同文書院大学記念センター  
リサーチアシスタント 暁 敏

### I. はじめに

東亜同文書院の学生（以下書院生）が、20世紀初頭から半世紀近く中国において大規模な調査を実施した。その調査範囲がほぼ中国全土に及んでおり、数多くの貴重な資料を残している。これらの資料は、言うまでもなく近代中国の社会経済の研究に大いに有益である。

その中で、書院生が現在の中国内蒙古自治区東北部に位置するフルンボイル（呼倫貝爾）地方において数回にわたって調査を実施している。実際には、書院生が当地域において調査を実施する前の段階から、書院生以外の日本人もこの地域で多くの調査を行なっている。そして、調査の成果として、数多くの調査資料が残された。これらをまとめた研究には、吉田順一の「日本人によるフルンボイル地方の調査—おもに畜産調査について—」<sup>1</sup>がある。

このフルンボイル地域は、ロシア、中国の二大勢力に挟まれた地域で、歴史上中国、ロシア（ソ連）、および日本が抗争を繰り返す舞台となった。さらに、1939年に同地域においては、現在の日本とモンゴルとの外交関係の中で、避けて通れない出来事「ノモンハン事件」が起きている。従来、政治・軍事上において、各政権に重要視されてきた地域である。

本稿では、『東亜同文書院大旅行誌』（オンデマンド版）の関係各巻を基本資料として使用する。

これらのもとに、書院生達が当時「秘境」とも言われているフルンボイルにどんなルートで入り、どんな調査ルートでどんな地域を訪れ、そして何を記録したかを検討し、さらに、書院生によるフルンボイルの調査の特徴を明らかにしていきたい。

### II. フルンボイルの歴史

書院生がフルンボイル地域において、数回の調査旅行を実施した。書院生が調査を実施した頃の同地域の時代背景等を知るためには、まず第一歩としてフルンボイルの歴史を確認しなければならない。

フルンボイルの地理的位置は、東部に大興安嶺山脈があり、南部は内モンゴルの現在の興安盟に接し、北部および北西部はアルグン川を境界としてロシア、西部および西南部はモンゴル国と接する。フルンボイルという名称の起源は、興安嶺の西部地域にある呼倫（フルン）と貝爾（ボイル）の二つの湖の名前から来ている。本稿でいうフルンボイル地域は、興安嶺の西部地域であることを限定しておきたい。

古来、フルンボイル地域は遊牧に最適な草原地域であり、東胡、匈奴、鮮卑、室韋、契丹、タタール、突厥等の遊牧民族の居住地だった。そもそも、行政区画としてフルンボイルが形成されたのは清の時代からである。17世紀から清朝政府は、モ

ンゴル地域を内外モンゴルと分け、盟旗制度を実施した。1636年、内モンゴルにおいて六つの盟、49の旗を設置した。その後何度かの調整を経て、外モンゴルにおいては四つの盟、86の旗を設置した。

しかし、フルンボイル地域はその内外モンゴルのどちらにも編入されなかった。ロシアと隣接しているフルンボイル地域は、地理的に重要な地域であるため、同地域では満州八旗制度が組織された。

1840年のアヘン戦争後、中国においては列強による侵略および分割支配が始まった。ロシアは1858年の「愛琿条約」と1860年の「北京条約」によって、中国の黒龍江北部の領土を手に入れた。さらに、1896年の「露清（ロバノフ・李鴻章）秘密協定」によって、ロシアは中国で東支鉄道（東清鉄道・中東鉄道）を敷設する権利を得た。

この鉄道敷設工事の開始とともに、フルンボイルに大量の漢人とロシア人労働者が流入した。こうして、工事をきっかけにフルンボイルの人口が膨張したのである。流入した人口は、主にハイラル（海拉爾）市と鉄道建設とともに新しくできた国境に位置する都市満州里市に人口が集中するようになった。

1911年、辛亥革命が勃発すると、ロシアの援助を求めている外モンゴルは清朝からの独立を宣言した。これを契機に、ロシアの支援も加わり、フルンボイルは逸早く反応し、同年の11月27日にフルンボイルの勝福を中心に、同地域の独立を宣言し、外モンゴルへの合流を求めた。

結果として、1915年の中露蒙三国キャプタ協定によって外モンゴルは、中国宗主権のもとで、外モンゴル自治だけが認められた。一方、フルンボイルにおいては、同年、「フルンボイルに関する露中協約」が締結された結果、フルンボイルは外モンゴルの自治から外された「特別区域」と指定され、中華民国政府管轄内の「自治区」となった。しかし、この自治制が1917年に起きたロシ

ア革命による政情の混乱に影響され、1920年に廃止されるようになった。

その8年後、1928年6月に起きた張作霖爆殺事件によって東北地方が動揺した際、ソ連および外モンゴルの援助のもと、フルンボイル青年党<sup>2</sup>による武装蜂起が起こり、再びフルンボイルの独立自治を求める「フルンボイル青年党事変」が起こる。

さらに、1929年7月、東北当局によるソ連の「赤化防止」と中東鉄道の権益回収をめぐる、ソ連との間に軍事衝突にまで発展した「中東鉄道事件」が起こる。その後間もなく、満州事変が勃発するや、満州国が建国され、フルンボイル地域においては興安北省が設置された。

その後、フルンボイル地域は満州国の行政区域になったため、日本人が安全にこの地に出かけることができたと言える。こうした背景もあり、書院生達は1931年から1935年の間に、毎年フルンボイル地域に出かけて調査旅行を行うようになった。

### Ⅲ. 書院生によるフルンボイルの調査

「東亜同文書院大旅行誌」を見る限り、書院生がフルンボイル地域で最も早く調査を実施したのは、1925年に実施した第22期生の「北満及國境調査班」<sup>3</sup>によるものである。その調査の具体的な道順は、上海—青島—済南—北京—大連—吉林—ハルビン—同江—大黒河—愛琿—チチハル—満洲里—ハイラル—平壤である。その中で、フルンボイルについては、主にハイラルと満洲里の両市の周辺を見学した。まず、鉄道を使って満洲里まで行き、在満洲里日本領事館を訪ね、現地事情の聞き取りを行った。次に、農商務省から派遣された志水氏に案内され、満洲里市で日本人が経営する試験農園と国境付近を見学した。次に日の朝、満洲里からハイラルへ向かい、ハイラルでハイラル公園と洗毛場を見に行った。今回の調査旅

行は、フルンボイルでの滞在時間が短かったため、記述として少ない。しかし、上記の案内人である志水氏は、志水語氏だったかもしれない。同氏は、1925年前後、『満蒙』等の雑誌でいくつかのフルンボイルに関する研究論文を発表している<sup>4</sup>。各論文の著者名のところにおいては「満洲里—志水語」と書かれている。年代と志水氏の滞在場所等をあわせて考えると上記の案内人の志水氏は志水語氏であることが推定できよう。もし本当に同一人物であれば、志水氏は当時のフルンボイルの事情に非常に詳しく、書院生が彼の話を通して詳細な現地事情と情報を得ることができたと考えられる。

1925年から1931年の間に、書院生がフルンボイルに出かけて行かなかった。ところで、上記の1928年に起きた「フルンボイル青年党事変」によって、フルンボイル地域は一気に世間あるいは日本人の注目を集めたのである。なお、「擾乱の巷と化した呼倫貝爾—各種の資源豊富兎に角不可思議な土地」<sup>5</sup>、「歴史は古い露支間の係争地・外蒙と合して独立を企てたコロンバイル地方」<sup>6</sup>、「今問題になっているコロンバイル如何なる地域を含み如何なる歴史を有ったか」<sup>7</sup>、「呼倫貝爾事件の裏面に潜む魔手—ポリシエヰキの関係愈々明日となる」<sup>8</sup>というようなタイトルによって当時の様々な紙面に登場した。さらに、1929年の「中東鉄道事件」の影響で、自然とフルンボイルに対する人々の関心が高まったと思われる。

1931年、第28期生の「露支國境遊歴班」<sup>9</sup>は、鉄道で満洲里に入り、そこからハイラルに戻った。ハイラルから馬車で草原に行き、モンゴル人の生活を見た。「大旅行誌」において、上記の「中東鉄道事件」後の満洲里とハイラルの町の悲惨な状況について触れ、フルンボイルの独立についても記述している。さらに、草原まで同行したブリヤート・モンゴル人との会話が記録されている。

一方、同じく第28期生の「黒龍江省遊歴班」<sup>10</sup>は、逆にハイラルで下車し、それから満洲里に向かう

ルートを選んだ。彼らはハイラルに着いた後、「昭和盛」という雑貨店を経営する日本人島田氏に世話になった。次の日に一行は島田氏とブリヤート・モンゴル人夫婦に案内され、馬車で草原へ向かった。翌日にハイラルから満洲里へ移動。一行は満洲里の在満洲里日本領事館で「露支國境遊歴班」のメンバーと合流した。のちに、領事館に勤める書院の先輩福間氏（福間徹、書院第22期生、福岡県出身、卒業後外務省に入り、中国各地に勤務—筆者）に、満洲里駐在武官上田大尉と満洲里領事館警察署長を紹介され、満洲里の現地事情の聞き取りを行った。同グループの旅行誌において、上記の「露支國境遊歴班」と同じように上記事件後のハイラルと満洲里の町の様子について触れている。また、ハイラル市の商業状況やフルンボイルの種族についても記しており、満洲里での聞き取りの内容および同市の当時の状況等について相当詳しく記述している。また、旅行誌の記述を通して、「中東鉄道事件」後と「満洲事変」前のフルンボイル地域の状況を知ることができる。

1932年になると、書院生の第29期生の第2班<sup>11</sup>と第6班<sup>12</sup>の2グループがフルンボイルを訪れている。第2班と第6班の道順は同じく、先に満洲里に到着し、在満洲里日本領事館を訪ね、書院の先輩の山崎氏（山崎誠一郎、書院第1期生、高知県出身、チチハル副領事、張家口領事、満洲里領事、芝罘領事を歴任、当時の在満洲里日本領事館の領事—筆者）と福間氏に会った。それから、山崎氏の紹介で、在満洲里特務機関の小原氏と国境監視隊の宇野隊長を訪問し、現地および外モンゴルの事情を尋ねた。こののち、ハイラルに向かい、山崎氏の紹介でフルンボイル蒙古政庁の顧問を務める猪之口氏を訪ね、現地事情を伺った。その後、第2班はハイラルを離れ、ハイラルより西南のガンジュルスム（甘珠爾廟）、將軍廟およびさらに南のハロンアルシャン（モンゴル語での温泉の意味）に向かって出発した。途中、モンゴル人のオボを見聞する時に、フルンボイル蒙古政庁のモン

ゴル人の傲氏に出会った。彼は書院生をフルンボイルのモンゴル上層部の人々に紹介し、書院生はモンゴル人官僚達に親切に歓待された。この傲氏という人物は、名前が華霖泰（傲霖泰ともいう）、早稲田大学出身、満州国建国後、興安北省の秘書官になる。しかし、皮肉なことに、この出会いから4年後、華霖泰は「凌陞事件」<sup>13</sup>に連座され、日本軍部に処刑されている（筆者）。

一方、第6班は、ハイラルに残り、ハイラル警備隊の守島警備隊長と面会し、モンゴル兵の訓練を見学した。また、前述の「昭和盛」の島田氏を訪ね、現地の経済事情を伺った。両班の旅行誌において、フルンボイルの政治や経済等について触れており、満洲里の国境付近の事情についても詳しく記述し、当時、満洲事変後の「ソ満」国境の事情等を理解するのに参考となるものである。

1933年、第30期生の「海拉爾調査班」<sup>14</sup>は、ハイラルに着いた後、北上してフルンボイルの三河地方を訪ね、そこから南下してハイラルに戻って満洲里を向かい、さらに、満洲里からハイラルに戻り、ハイラルに2週間ほど滞在した後、南のガンジュルスムとハロンアルシャンに出かけていった。ハイラルから満洲里に向かう途中、同班の卜部義賢と松見慶三郎の両氏は、石炭で有名なダライノールの町を訪ねた。今回の調査旅行において、「海拉爾調査班」は書院生で初めてかつ唯一フルンボイルの北部に位置し、当時フルンボイルにおいて唯一の農耕地帯であり、白系ロシア人が多く住む三河地方に足を踏み入れた。また、同調査班は書院生で最も長く（滞在期間一ヶ月以上）現地に滞在し、ハイラルを拠点にしてフルンボイルの南北を踏破し、その調査範囲が書院生のフルンボイル調査の中でも一番広い範囲に及んだ。旅行誌において、調査した地域の状況について記述しただけではなく、フルンボイルの地理、人口、歴史、行政等についても触れている。その後、調査の成果として『第27回支那調査報告書』第25巻「三河地方及北部国境地方調査班」の報告書と

してまとめられた。同報告書において、三河地方及び北部国境地方、南部フルンボイル、満洲里の事情およびフルンボイルの畜産について記述している。同時に、この報告書は書院生による本格的な「フルンボイル調査報告書」として、評価されるべきものであろう。

1934年、第31期生の「札蘭屯・免渡河・満洲里調査班」<sup>15</sup>は、まず、ハイラルに到着し、そこから満洲里に入り、満洲里から再びハイラルに戻り、ハイラルからフルンボイル南部に位置するガンジュルスムとハロンアルシャンに出かけた。その後、班員の奥田重信が一人でハロンアルシャンから歩いて興安嶺の南麓を横断して索倫へ向かった。旅行誌に、ソ連のチタから帰満した者から伺ったチタの現地事情、満洲里のモンゴル騎兵団、ガンジュルスムにおける定期市（いち）についての記録が含まれている。今回の調査旅行は行きと帰りも東支鉄道を使った他の調査班と違って、帰りに一人の書院生がハロンアルシャンから直接南下してフルンボイルを後にしたのである。

1935年第32期生の「龍江省景星縣・泰康縣調査班」<sup>16</sup>は、フルンボイルを通過しただけなのか、あるいは他の何かの理由で旅行誌においてフルンボイルについての記述が見られなかった。

上記で見えてきたように、書院生は1925年から1935年までの10年間、フルンボイル地域において全8班（コース）の調査旅行を実施している。彼らの残した旅行誌の記録を通して、当時の時代背景や現地の事情等をうかがい知ることができる。さらに、書院生達の調査旅行の実際や実施状況等を知るのに参考となるものであろう。

#### IV. 書院生によるフルンボイルの調査の特徴

こうしてフルンボイル地域に全8コースの調査旅行を実施した書院生が残した記録が、当時の現地情報を把握する意味で大変貴重であることは言うまでもない。これらのフルンボイル地域で実施

したこの8コースの調査旅行の記録を総合して、書院生によるフルンボイル調査の特徴をまとめることができる。以下、書院生によるフルンボイルにおける調査旅行のいくつかの特徴について言及してみたい。

第一に、鉄道を有効に利用したこと。フルンボイルの東西を貫くような東支鉄道が存在したため、書院生による奥地であるフルンボイルでの調査旅行がある程度安易にできたと言える。書院生のフルンボイルに入るルートとしては、ほとんど東支鉄道を使い、ハイラルあるいは満洲里に到着している。フルンボイルから帰途につく場合も、第31期生の「札蘭屯・免渡河・満洲里調査班」を除いて、ほとんど東支鉄道を使っている。また、東支線に存在するハイラルと満洲里の両市を拠点に馬車や車を利用して踏査旅行を実施したのである。

第二に、フルンボイルにおいて、書院独自の人的ネットワークが存在していた。書院生によるフルンボイル調査の始まりは1925年からである。実際には、本格的に毎年フルンボイルに出かけていくようになったのは1931年からである。1931年に満洲事変が勃発し、その後満州国が建国され、フルンボイル地域に満州国を構成する興安北省が設置された。そのため、日本人が当局に便宜を与えられ、フルンボイル地域に簡単に入ることができた。とはいえ、学生が国境地域に出かけて自由に調査することがそれほど簡単なことではなかったと思われる。そこで、現地に存在するのは書院独自の人的ネットワークである。前述したように、書院卒業生の山崎誠一郎領事と福間徹外務省職員が満洲里に勤務しており、彼らは書院生の調査旅行にさまざまな便宜を与えた。よって、書院生のフルンボイル調査が無事かつスムーズにできたと言える。また、このことから書院卒業生間の深いつながりをうかがい知ることができる。

第三に、書院生は、フルンボイルに到着後、まず現地の日本の諸機関あるいは日本人から情報を

収集し、それから自分たちの踏査旅行を実施したのである。書院生は、フルンボイルに到着後、単に領事館など機関を通じて現地情報を手に入れるだけではなく、現地の日本人の様々な話を聞き、さらに情報や資料を充実化した。これらを踏まえて、現地で自分達が見たあるいは確認したものを記している。さらに、フルンボイルの奥地まで出かけ、現地の人々（モンゴル人）とも色々な形で接触し、そこから得た情報をも記録している。この意味でも書院生の記録は評価できる。

第四に、調査範囲が次第に拡大していったことである。書院生のフルンボイル調査は、最初のハイラルと満洲里の周辺における調査から、フルンボイル南部のハロンアルシャン、北部の三河地方まで拡大していった。1925年の第22期生による調査は、満洲里とハイラルの近辺にとどまった。1931年の第28期生による調査は、満洲里とハイラルの近辺から草原へと踏破調査範囲を伸ばした。1932年の第29期生による調査は、フルンボイルの最南端でもあるハロンアルシャンまで行った。1933年の第30期生による調査は、南のハロンアルシャンにとどまらず、さらに、北の三河地方まで調査範囲を拡大していった。こうして、調査範囲の次第に拡大したことによって、調査が深化され、記録内容も充実化されていったのである。

最後にもう一つだけ付け加えるならば、書院生の調査地は国境付近に集中している点である。もちろん、フルンボイル地域全体が国境地域であるが、その中で、書院生が足を踏み入れた地方は、ほとんど国境に隣接している地域である。たとえば、満洲里は中口国境都市である。ハロンアルシャン周辺は中蒙国境に隣接している。三河地方は中口国境に位置している。この点について、具体的な理由はよくわからないが、その理由の一つとしては国境に対する若い日本人学生の憧れだったかもしれない。

## V. おわりに

以上、東亜同文書院の学生によるフルンボイルでの調査旅行の概要について述べてきたおり、主に書院生の調査ルート、調査地、記録した内容に触れ、最終的に書院生によるフルンボイル調査のいくつかの特徴を取り上げた。これらの調査旅行の記録は、当時のフルンボイルの諸事情を理解するのに貴重な資料を提供している。同時に、これらの調査旅行は書院生にとってもフルンボイルを自らの体で知ることができた大変貴重な経験だった。

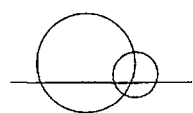
なお、本稿は書院生によるフルンボイル調査に関する研究の基礎作業であるため、「東亜同文書

院大旅行誌」以外に存在する「調査旅行報告書」について、特に言及しなかった。今後、フルンボイル地域に関する「大旅行誌」の記録と「調査旅行報告書」の諸資料を検討することによって、書院生が記録した近代のフルンボイルの「地域像」の解明に努めたい。

また、本稿ではフルンボイルという一つの地域に焦点をあてているが、書院生の調査旅行がほぼ中国全土に及んでおり、今後、他地域での書院生の調査旅行の実態を解明しながら、その地域の20世紀前半の実像を明らかにしていきたい。あわせて、これらの作業は書院の「大旅行調査」研究の深化にとって必要不可欠であろう。

- 1 吉田順一「日本人によるフルンボイル地方の調査—おもに畜産調査について—」(早稲田大学大学院文学研究科「早稲田大学大学院文学研究科紀要」第4分冊、1999年)。
- 2 1917年にフルンボイルの青年達を中心に組織されたフルンボイルの高度自治と地方政治の改良を目的とした党組織。
- 3 北満及國境調査班「アムールの悲歌」(東亜同文書院「乗雲騎月」1926年(愛知大学オンデマンド版、2006年)、pp. 112 - 168)。
- 4 たとえば、志水語「呼倫貝爾塩湖事情」(大連満蒙文化協会「満蒙」1925年9月号)。「呼倫貝爾タルバガン市況」(同「満蒙」1925年11月号)。「満洲里に於ける薬品類状況」(同「満蒙」1926年6月号)。「呼倫貝爾羊毛市況及満洲里獸腸相場」(哈爾濱商品陳列館「露亜時報」1927年9月号)等がある。
- 5「満州日日新聞」1928年8月15日。
- 6「東京朝日新聞」1928年8月21日。
- 7「中外商業新報」1928年8月23日。
- 8「京城日報」1928年10月20日。
- 9 露支國境遊歴班「アムールの流れ」(東亜同文書院「千山萬里」1932年(愛知大学オンデマンド版、2006年)、pp. 2 - 47)。
- 10 黒龍江省遊歴班「東支線を行く」(東亜同文書院「千山萬里」1932年(愛知大学オンデマンド版、2006年)、pp. 538 - 578)。
- 11 第二班「草原を思ふ」(東亜同文書院「北斗之光」1933年(愛知大学オンデマンド版、2006年)、pp. 155 - 170)。
- 12 第六班「蘇・満の國境に立ち」(東亜同文書院「北斗之光」1933年(愛知大学オンデマンド版、2006年)、pp. 173 - 193)。
- 13 凌陞はフルンボイルの地方有力者出身。満州国建国後、フルンボイルに興安北省が設置され、凌陞が興安北省省長に就任した。彼は、満州国に不満を抱いており、絶えず満州国側にモンゴル人の権利を強く主張していた。彼の行動および主張が日本軍部の疑いを招き、のちに「通ソ・通蒙」という嫌疑がかけられて日本軍部によって処刑されたのである。これがいわゆる「凌陞事件」である。
- 14 海拉爾調査班「黃鹿行」(東亜同文書院「亜細亜の礎」1934年(愛知大学オンデマンド版、2006年)、pp. 424 - 440)。
- 15 札蘭屯・免渡河・満州里調査班「白樺の興安嶺を越えて」(東亜同文書院「出處征雁」1935年(愛知大学オンデマンド版、2006年)、pp. 569 - 603)。
- 16 龍江省景星縣・泰康縣調査班「北窓に面する二人」(東亜同文書院「翔陽譜」1936年(愛知大学オンデマンド版、2006年)、pp. 423 - 445)。

〈論文〉



# 東亜同文書院生による「大旅行誌」を用いた 20 世紀初頭の寧夏・内蒙古の地誌的研究

－ 第 8 期生「甘肅額爾多斯班記」をもとに－

愛知大学大学院文学研究科地域  
社会システム専攻・修士課程 高木秀和

## I はじめに

筆者は、東亜同文書院第 6 期のある学生が、「大旅行」で内蒙古とその周辺を踏査した際の様子を報告した学友会報の記事をもとに、彼らがどんな事物に関心をもったのかを検討した(高木 2006)<sup>(1)</sup>。本論はそれを受け、第 8 期の書院生がまとめた「旅行記念誌」のなかから、内蒙古とそれに隣接する地域を踏査した「甘肅額爾多斯班」による「甘肅額爾多斯班記」をもとに、内蒙古とその周辺(具体的には寧夏から張家口)に限り班員がどのような事物に関心をもったのかを検討し、可能な範囲で第 6 期生のそれと比較してみることを目的とする。ただし、後述するように第 8 期生によるそのうち内蒙古とその周辺に関する記述は残念ながらそれほど多くなく、むしろ上海から甘肅省までの記述に力点が置かれている。第 6 期生の報告は学友会報に掲載されたもの<sup>(2)</sup>とはいえ、内蒙古とその周辺に関する記述は第 8 期生のものより詳しい。しかしながら、彼らの報告を地誌的なものとしてとらえるならば、20 世紀初頭における内蒙古とその周辺の地域情報が断片的ながら明らかになるといえる。

なお本論は、愛知大学がオンデマンド出版(全 33 巻+解説 1 巻)として刊行した 4 巻目の「旅行記念誌」を底本として用いる<sup>(3)</sup>。

## II 第 8 期生による「旅行記念誌」と「甘肅額爾多斯班記」について

第 8 期生の米内山庸夫氏がまとめた「第八期生回想録」(『東亜同文書院大学史』収)<sup>(4)</sup>によると、彼らは 1908 年(明治 41)に東亜同文書院へ 75 名で入学した。時は清末で、実権は西太后により握られていた。当時、書院では総髮姿の学生が目立ち、第 6 期生たちが「大旅行」を終えて帰院するとさらに総髮や辮髮が増え、「この頃の書院はまさに総髮時代ともいえるありさまであつた」<sup>(5)</sup>が、1911 年(明治 44)の辮髮廃止令公布により辮髮は見られなくなった<sup>(6)</sup>。また書院生活に慣れてくると、「私共は中学校を出て専門学校<sup>(ママ)</sup>へ入つたのであるが、同文書院はただの専門学校ではないということが分つて来た」<sup>(7)</sup>という。

さて、彼らが編んだ『旅行記念誌』の凡例によると、第 8 期生が「大旅行」を実施したのは、1910 年(明治 43)の夏から秋であり、約 70 人の書院生たちが 11 の班に分かれて全国各地を踏査した<sup>(8)</sup>。また、根岸教授が序文を寄せているが、「東、黄海・東海に起り、西、巴蜀・寧夏に達し、北三姓・齊々哈爾に始まり、南、滇越・嶺南に及び、其足跡の印する所、実に十有三省・滿洲・蒙古・東京に亘る」<sup>(9)</sup>と記しているように、11 班(うち 1 班は北京駐在班)が広大な範囲を巡った「大旅行」であった。

そのうち、「甘肅額爾多斯班」は 6 月 28 日に上

海の東亜同文書院を出発し、主要都市のみを書き抜けば、洛陽、西安、寧夏府、包頭、帰化城、張家口、北京というコースを辿り、11月8日に帰院した(表1)。班員は5名で、細田、大西、功力、小笠原、村山の各氏である(写真1)。なお前出の「第八期回想録」には、写真両端の細田、村山両氏の卒業後の活躍が記されていないが、大西、功力、小笠原俊三の各氏の華々しい経歴が紹介されている。まず大西氏であるが、書院卒業後は朝日新聞で活躍し、滬友会が創立80周年記念として編んだ「東亜同文書院大学史」によれば、「支那部長、論説委員となり、戦後は論説主幹(役員待遇に)、また東亜同文会の清算に関与した」<sup>(10)</sup>とある。残念なことに、米内山氏がまとめた「第八期回想録」が発表された時点(1955年)ですでに逝去している<sup>(11)</sup>。功力氏は伊藤忠商店に入社後、取締役兼支那支店総支配人、本社常務取締役などの要職を歴任し、「大正、昭和にかけて伊

藤忠商事に拠つて我国の産業、貿易発展に努力したことは書院出身者として特筆に値する一人であろう」<sup>(12)</sup>。小笠原氏は満人の開発指導や居留民のために活躍し<sup>(13)</sup>、「奉天商業会議所書記長から北満洲日報の社長、チチハル居留民会長、その他要職を歴任した」<sup>(14)</sup>し、この『旅行記念誌』の編集兼発行者を務めている<sup>(15)</sup>。

彼らが記したこの「甘肅額爾多斯班記」は、『旅行記念誌』の397～434頁に収録され、本文とは別に4頁分の口絵写真と、旅行経過表(458～462頁)がある。

次章以降、彼らの「大旅行」の様子を具体的に検討していくが、「甘肅額爾多斯班記」からの引用が多くなるため、注を付すのではなく、引用箇所を「」で示し、引用頁数を直後に( )で記すことにする。また、漢字は常用漢字に改め、活字が潰れて判読不可能な文字は□に置き換える。

### 甘 肅 額 爾 多 斯 班



細 大 功 小 村  
田 西 力 笠 山  
原

【写真1】班員集合写真(『旅行記念誌』を転載)



表 1 「甘肅額爾多斯班」の旅程 [明治 43 年 (1910 年)]

月日	宿泊・滞在地	月日	宿泊・滞在地	月日	宿泊・滞在地
6月28日	上海発、南京泊	8月21日	經揚郎庄打泊	10月14日	チューチアチュアン泊
29日	(船中泊)	22日	七營泊	15日	張家口着・泊
30日		23日	王家園庄泊	16日	張家口滞在
7月1日	漢口着・泊	24日	官亭泊	17日	北京着・泊
2日	漢陽滞在	25日	黒王岔泊	18日	北京滞在
3日	武昌滞在	26日	平遠県泊	19日	
4日	漢口滞在?	27日	鞏州堡泊	20日	
5日	駐馬店泊	28日	惠安堡泊	21日	
6日	洛陽着・泊	29日	石溝駅泊	22日	北京滞在
7日	洛陽滞在?	30日	□州着・泊	23日	
8日		31日	□州滞在	24日	
9日	新安県泊	9月1日	望河堡泊	25日	
10日	灑池県泊	2日	寧夏府着・泊	26日	
11日	灑池県滞在	3日		27日	
12日	硤石駅付近泊	4日		28日	
13日	硤州泊	5日		29日	
14日	□実? 県泊	6日		30日	
15日	□郷? 県泊	7日		31日	天津→營口→大連→旅順等
16日	□□泊	8日	寧夏府滞在	11月1日	を歴訪
17日	華陰県泊	9日		2日	
18日	華州泊	10日		3日	
19日	潤? 南県泊	11日		4日	
20日	(半夜行)、臨潼県泊	12日		5日	
21日	臨潼県滞在	13日		6日	
22日	西安着・泊	14日	李剛? 堡泊	7日	大連発 (船中泊)
23日		15日	平羅県泊	8日	上海着
24日		16日	石嘴子着・泊		
25日	西安滞在	17日	石嘴子滞在		
26日		18日	石嘴子滞在、(船中泊)		
27日		19日	(船中泊)		
28日		20日	(船中泊?)、包頭着・泊?		
29日	咸陽泊	21日	包頭滞在		
30日	醜泉県泊	22日	薩拉齊泊		
31日	乾州着・泊	23日	三把樹泊		
8月1日	乾州滞在	24日	10月1日	ピクチャー泊	
2日	永□県泊	25日	2日	帰化城着・泊	
3日	鄆州着・泊	26日	3日		
4日	鄆州着	27日	4日		
5日	長武泊	28日	5日	帰化城滞在	
6日	涇州着・泊	29日?	6日		
7日	涇州滞在	30日	7日	買代兒泊	
8日	白水泊		8日	ターユーシユー泊	
9日	平涼府着・泊	10月1日	9日	魁元図泊	
10日		2日	10日	シシャイング泊	
11日	平涼府滞在	3日	11日	チャオクオル泊	
12日		4日	12日	チャンヤン堡泊	
13日	瓦亭泊	5日			
14日	固原州着・泊	6日			
15日		7日			
16日		8日			
17日	固原州滞在	9日			
18日		10日			
19日		11日			
20日		12日			
		13日			

(「甘肅額爾多斯班」の記述より作成)

注 1 判読不明な文字は□とした。

注 2 到着日と出発日を除いて 2 日以上滞在した場合は、まとめて示した。

### Ⅲ 「甘肅額爾多斯班」が見聞した 20 世紀初頭の 内モンゴとその周辺

冒頭で述べたとおり、本論では寧夏から張家口までの区間に限って彼らの記述を検討したい。前出の表1を再びみてみると、この間を45日かけて移動および滞在している。出発・到着・帰院日も含めて134日間をこの「大旅行」に費やしているので、当該区間は全体の33.6%であり、約3分の1の期間である。また、「甘肅額爾多斯班記」の本文は全部で38頁あるが、そのうち当該区間の記述は15頁で、全体の39.5%である。すなわち、この区間は全体から見れば3～4割程度の分量であり、全体からみればさほど多くない。

それでは、本文の内容をピックアップして作成した表2も参照しながら、具体的に彼らの足どりを確認していきたい。なお、表の各項目は、筆者が前稿で作成した表のそれを採用し<sup>(16)</sup>、次章での比較に用いることが可能ようにした。

まず、寧夏府に関する記述である。ここでは、「土着文化」、「外来文化」、「都市経済」に関する記述が多い。まず土着文化では、滞在中に知り合った蒙古人たちと交流の機会を持ち、会食などを行っている。そこで聞いた彼らの歌声は悲哀に満ちたもので、班員は鉄木真（テムジン）への哀悼の気持が込められていると感じたが、実際は「男女相思の歌」(419頁)など世俗的な歌であった。また「外来文化」では、キリスト教布教のためにやってきた西洋人について述べ、その主人は「華服を穿ち辮髪を結ふ華語をあやつること頗る巧み」(420頁)で、この場所にやってきて7年が経過し、信者が40人以上いるということで、その目的を着々と達成しようとしている。また、懐中時計や眼鏡を身に付けた蒙古人に出会っているが、これも都市に居住しているからこそこのような生活を享受できていると考えられる。さらに「都市経済」では、役所が置かれる地方政治の中心であり、商店が集まる経済の中心としての性格を持っていることが

分かる。また、電報局もあり、後述される(428頁)がここで日韓併合について知ることになる。

寧夏府から石嘴子の間では、「地形・自然環境」の記述が多くみられ、「雄大なる大陸的自然」(420頁)、すなわち賀蘭山とオルドス沙漠と黄河がつくり出す風景に心を奪われている。また賀蘭山の最端である炭山に近づくと、ちょうど水稻の収穫時期にあたり、遠く日本のその光景に重ね合わせ、ふるさとを懐かしんでいる。なお、「都市経済」の項にあるように、低次の中心地では市(定期市か)が開かれており、このような記録を集めれば地域住民の生活圏を明らかにすることが可能である。

石嘴子では、「都市経済」について比較的詳しく述べられている。石嘴子は人口1千人ほどで目立った商店などはないが、「今此処に隠れたる石嘴子を紹介すべき必要がある、否少なくとも吾人には此地を世に公にすべき義務を感じる」(422頁)とし、その理由を交通の利便性から「甘肅羊毛の集散地たる」(422頁)からとしている。ここでいう交通とは、黄河を利用した民船による水上交通のことである(写真2)。一般的に寧夏はその大市場として知られているが、いまだ大市場というに及ばないとし、①「殊に寧夏は黄河々岸を去る三十清里の地にあれば運搬せんとするに当り其不便云はん方なく」、②「寧夏石嘴子間の舟行黄河水浅くして自由ならざる」(422頁)からと説明している。そのため、オルドスやアラシャンの一部と甘肅省の羊毛のほとんどはこの地に一度集められ、包頭に運ばれるという。

しかし、1週間の「船中生活」の項にあるように、包頭までの黄河の水深も比較的浅く、舟が一日に何度も座礁を繰り返した。「船中生活」では時間を持って余し、ここでも風景を眺めながら鉄木真のことを考えている。この黄河下りを、「甘肅旅行と蒙古旅行との区画をつけたる」(426頁)ものとしている。

そんなことをしながらやって来た包頭での滞在は2日間のみで、両替や車を雇うなどといったこ

表 2 「甘肅額爾多斯班」が関心を抱いた事項

地名	地形・自然景観	史跡	土着文化	外来文化	都市経済	日本人	気象その他
寧夏府			羊肉のみを嗜好する回民、酔った蒙古人が歌う蒙古の歌→悲哀な歌声、蒙古人との酒宴	福音堂→西洋婦人と華服、辮髪、華語の以上の信者、コート・ヒート、軍帽をかぶる短髪のアラ善蒙兵士、懐ら下げた眼鏡をかいた蒙古人	県衙門、2つの大商店の集積、漢口・天津からやって来た出稼ぎの小商人、テントでの商売、寧夏府の北15清里にある寧夏將軍の居城、電報局あり(後述)	卒業生波多野氏、王爺府に日本人?	滞在中の漬物づくり、醬油の購入、新鮮な淡水魚→味河の船旅の必需品の購入
寧夏府～石嘴子	見渡す限り果てしない草原、秋草の紅葉と緑草との調和、賀蘭山、柳の並木、黄河の奔流、霞のように際涯なく連続しているオルドス沙漠、ラクダの群(以上、平羅県)、砂地と所々の大きな砂丘、平野の日の出にも趣がある、近づく賀蘭山、オルドス沙漠とアラシヤンを分流する勇敢な黄河の流れ、炭山に沈む夕日	長城	米の収穫と田園風景→日本を思い浮かべ懐かしい		仲秋前で市が開ける黄梁橋→非常な雑踏、船中用の食料等の購入		秋
石嘴子	オルドスから眺める朝北の平野、雄大な風景		名月を眺めるとき、街は爆竹などで騒がしいが、オルドス沙漠の方は時おり蒙古人が操る馬の音が聞こえるのみ		一見寒村に過ぎない、寧夏と包頭間を往來する民船、交通の要衝、甘肅羊毛の集散地(寧夏は黄河から遠く、寧夏から石嘴子までの水深は浅いため不利)、大きな6つの洋行、民船 200 艘		乗り込む舟の決定、昼食の夕立、中秋の名月→寧夏で餅や水瓜や清酒を酌み交わす、君が代を二唱
船中生活	水深が浅いため機度も座礁→水流が早いために動き出せばスムーズ、白羊の群	「鉄木真の回想」	座礁した際に船頭は水中に飛び込んで対処、黄河の水で炊いた飯は赤くてジャキジャキと音がる				民船での生活の様子、船客にあだ名を付ける、蚤取り、携帯の腰刀「日本号」の手入れ
包頭					商業が活発、換銀、蒙古帽や羊皮、商会総局や厘金局		車の手配
包頭～焜化城	漠々たる平原、北には陰山、南はオルドス沙漠、その間を悠々と流れる黄河、ラクダや羊や馬の群		西洋文士の別荘を思わせる陰山の谷間のラマ寺、夜に蒙古犬の襲撃、土を固めた小家が5、6軒(三把樹)→馬の屠殺、鷹飼				櫛の様な雨(三把樹)、朝の大陸の冷え切った空気が、路上の水溜りはみな凍っている、酒と卵と麵の食事、蒙古人に間違われる
焜化城			ラマ廟		工芸局→毛氈子等の出品はなく実際は木綿のみ、換銀→1両1吊250文の相場	豊鎮より出張の田中佐吉氏、氏と何度も会食	焜化城到着祝、日韓併合と日本の大洪水を知る、車の手配、雨
焜化城～張家口	真っ白な陰山、平原から山道へ(ターヌーシュー)、蒙古の草地		班員を慕う蒙古人、漢人に駆逐される蒙古人を気の毒に思う、高原中の一軒屋と蒙古犬(魁元園)、荒原中の一軒家→馬糞で煮る(コルスタイ)、蒙古人女将の意地悪さと欲の深さ、馬の飼料の草は栽培(シシャイング)		張綏鉄道はチューンアチューンまで延びる(「建築列車」を運転)		顔の皮も破れんばかりの陰山嵐、朝の温度-14℃(魁元園)、白菜を生で食べる(チャオクオル)
張家口			住民を山河のある暮らしをしているので風雅の人々と感じる		思ったよりも貧弱に見えた外城	義成洋行の富岡氏、石井氏、北京から来た第一期の内藤氏	義成洋行と会食時に俳句会を行う→相手方に軍配

(「甘肅額爾多斯班記」の記述より作成)



とのほかは「調査の重荷も此地で下したので専ら町内の見物に力めた」(426頁)。なお、包頭以降のルートは、第6期の「晋蒙隊」のそれとほぼ一致していると考えられる(図1)。

包頭から帰化城の間では、大平原から見る陰山とオルドスが印象的であったようである(「地形・自然景観」)。また、夜中に便所に行く際の蒙古犬の襲撃や、「棒の様な雨」(427頁)など、第6期の「晋蒙隊」の記録にみられるようなことを彼らも体験している。そこで蒙古犬対策として、「本旅行隊規則第十三条に今後夜間の大小便は屋内に於てすべき事の一ヶ条を加へた」(427頁)ことから、よほど恐ろしかったとみえる。

帰化城(写真2)では、到着初日に日韓併合のニュースを正式に知った。電報局のある寧夏府で第一報を聞いたときには、それが信じられなかった。曲解を恐れずに述べると、これまでの「旅中は単に食ふ事呑む事寝る事の外は念頭に何もなか

つた」(428頁)とあるように、彼らにとって内モンゴは調査のメインではないと考えられ、包頭を出発して以来、麺や酒といった簡単な食事だったのが、帰化城に着いて「大御馳走」(428頁)を食べたり、豊鎮の田中佐吉氏と連日会食するなどにより心が解放されたといえる。「都市経済」の項でピックアップしたように、それでも町内見物の一つとして工芸局を見学しており、「南京南洋勸業会に帰化城工芸局の名前で毛氈子等が出品されて居たのだから其実況を見んと希望」で訪れたが、「然るに実際は木綿類のみにて他に一物も無いので一寸呆れた」(428頁)と感想を述べている。なお、帰化城では包頭に比べて長期間滞在しているが、4日目に雨が降ったからであり、田中氏との対面や雨が降らなかったら2、3日で出発していたと思われる。

帰化城から張家口の間では、「地形・自然景観」や、朝の「顔の皮の破れん許り」の「陰山嵐し」(430

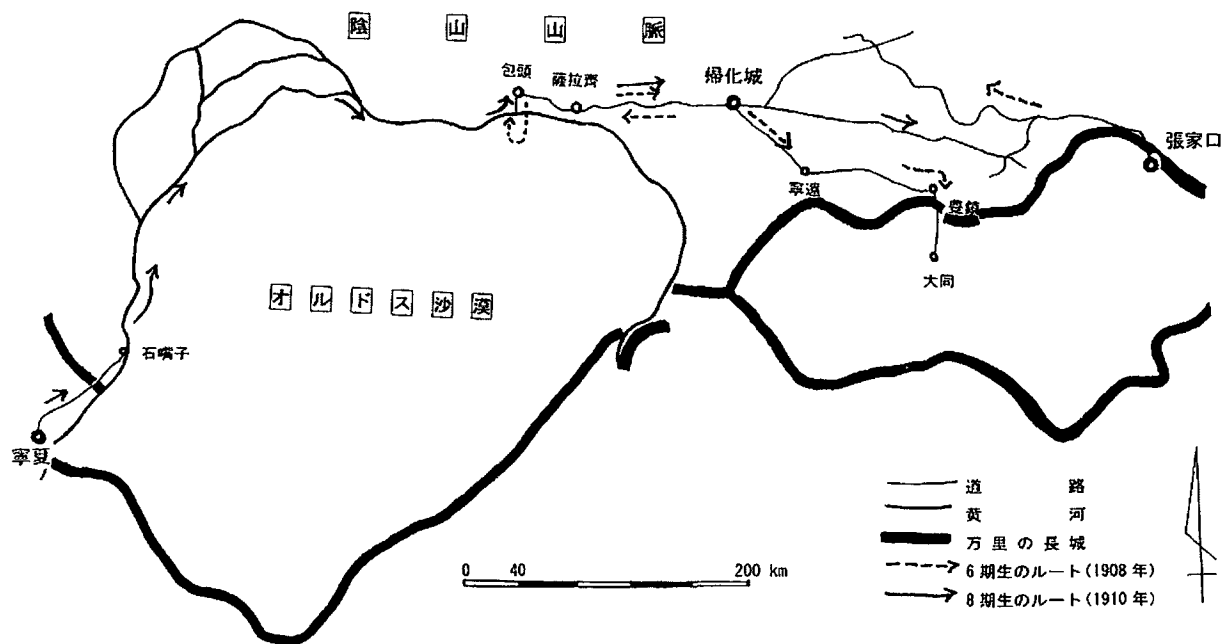
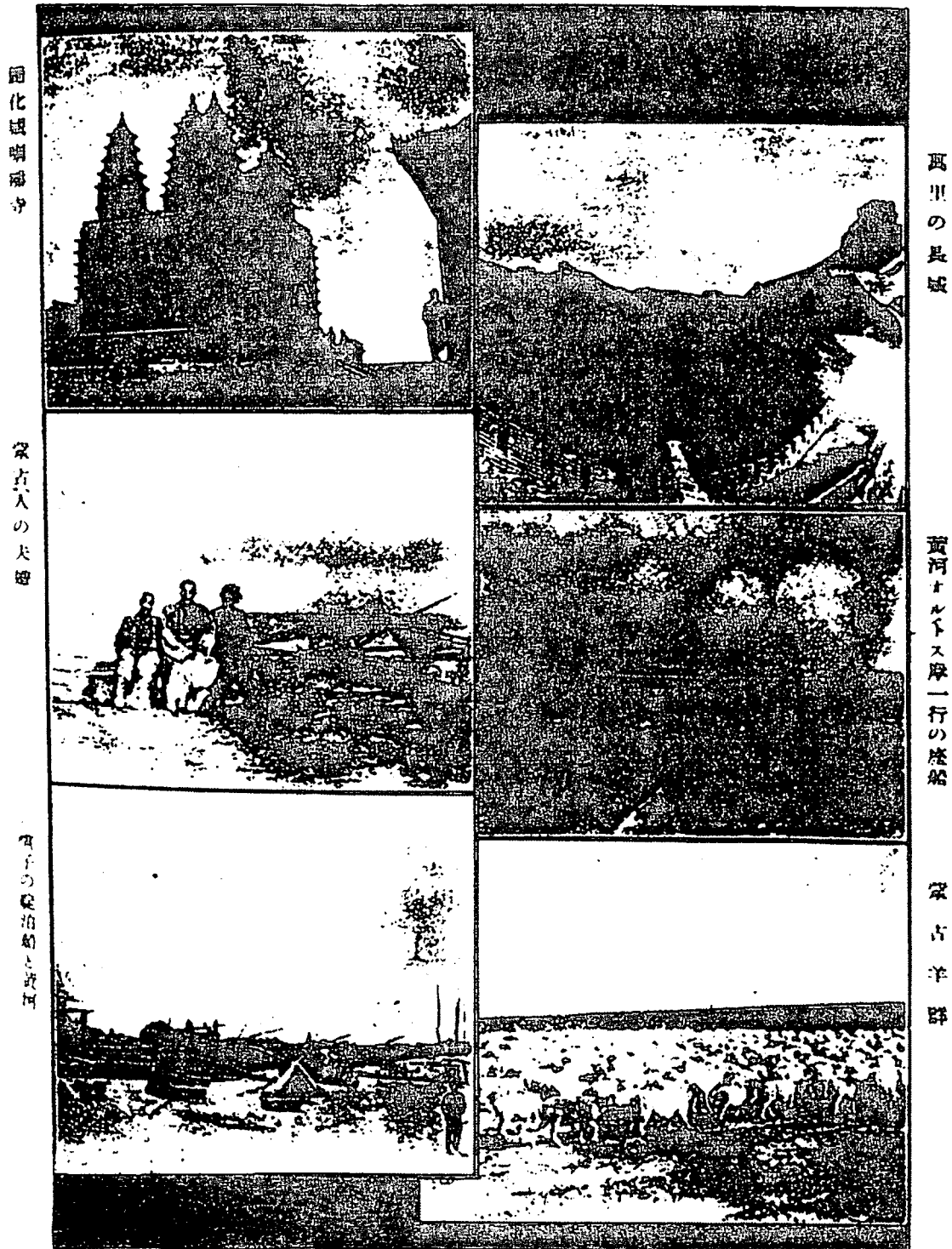


図1 第6期「晋蒙隊」および第8期「甘肅額爾多斯班」のルート(一部)  
ただし、帰化城～張家口の正確なルートは不明。



[写真 2] 口絵写真の一部（「旅行記念誌」を転載）

頁)など、ダイナミックな自然に驚いている。そのような広大な空間のなかに、彼らが宿をとったような小さなムラが点在している。そんなムラで生活している蒙古人たちは漢人に追い立てられ、班員は彼らのことを気の毒に思っている。シシャイングで出会った宿の「蒙古人女将の意地の悪さと、欲の深さは漢人に対抗して宿屋経営をする丈ありて強固」(431頁)と述べているように、蒙古人の漢化のことを考えれば、彼女の態度もある程度許容できるのであろう。

張家口では、第6期生の「晋蒙隊」もお世話になった「義成洋行」を訪ね、彼らと会食をしながら俳句会を催している。この「甘肅額爾多斯班記」を読んでもと、何箇所か俳句や詩歌が登場するので、彼らには文学的な素養があるといえる。しかし、「軍配扇は常に彼方に挙げた」(432頁)とあるように、日常的に俳句会を開いていると思われる義成洋行の人たちにはかなわなかった。また、「張家口の人には此山あり河ある地に御生活さるゝだけありて流石に風雅の人々とのみ見受けた」(432頁)という感想を述べている。

なお、張家口・北京間は汽車で移動し、北京滞在後は天津や大連などの都市を巡り、11月8日に帰院を果たした(前出の表1参照)。

#### IV 第6期「晋蒙隊旅行記」と第8期「甘肅額爾多斯班記」の比較

筆者は前稿において、「晋蒙隊旅行記」の内容を次のように整理した。

- ①内陸の寒暖差が大きく「[棒の如き]雨」が降るように変化に富んだ気候、ダイナミックながらも変化の乏しい風景といった自然環境。
- ②ヨーロッパ系の宣教師・中国各地の商人を中心に、日本人も含めて広域から人々が入り込んでいる状況。
- ③蒙古人の領域に漢族が入り込み、ラマ教を巧みに利用しながら蒙古人を駆逐し、生活文化を漢

化させ、蒙古人からはかつての悍猛さや武勇は感じられなくなった状況。

である<sup>(17)</sup>。

以上、第8期「甘肅額爾多斯班記」の内容の一部をみてきたが、彼らもこの①から③を実感しているといえる。ただし、内蒙古とその周辺がこの「大旅行」のメインではないので、詳しい考察などはなされていない。

ここで、第8期「甘肅額爾多斯班記」の内容をまとめた表2と、第6期「晋蒙隊旅行記」の内容をまとめた表3を用いて、彼らの関心の違いをみてみたい。

各項目の分量の違いから関心事項の違いをみてみると、第8期のそれは第6期のそれに比べて「都市経済」に関する記述が比較的充実しているが、「史跡」や「外来文化」に関する項目が少ない。第6期の「晋蒙隊」は、著名な史跡に近づいたり到着すると、その主人公に思いを馳せるロマンチスト的性格の持ち主であったが、第8期の彼らはむしろ客観的に歴史を捉え、史実を辞書的に説明したり、(史跡で詠んだものは少ないが他の場所で詠んだものにも共通するという意味で)観察事項や客観的事項を織り交ぜた詩歌を創作している。拡大解釈をすれば、第6期の「晋蒙隊」(とくに、筆者の玉生武四郎氏)は比較的歴史や文化に関心を持っている人たちであるが、第8期の「甘肅額爾多斯班」は「都市経済」に関心を持っていることから、比較的現実・客観主義的な傾向にあるように考えられる。

#### V おわりに

以上、第8期「甘肅額爾多斯班記」の内容を、寧夏府から張家口までの区間に限って検討したのち、第6期の「晋蒙隊旅行記」の内容と比較してみた。両者の作品の性格の違い(第6期のそれは学会会報に掲載された簡易版であるが比較的当該地域のことが詳しく書かれている。第8期のそれ

表3 「晋蒙隊」が関心を抱いた事項（高木2006を転載）

地名	地形・自然景観	史跡・仏教寺院	土着文化	外来文化	都市経済	日本人	気象その他
北京～張家口	八達嶺に至る山道、八達嶺からは砂礫が多い高原、その頂上から眺める「雲谷」と羊群	万里の長城関係（八達嶺の狼煙台跡・居庸関・鉄木真）、鳴（寺院ほか）、宣化府の荒廢	馬に乗った蒙古人、南京虫・蠅子	回教徒（土人の子孫）の村（西貨市）→運送業を営む		「師範学堂」に教習田氏（宣化府）	「果物に富める地」（八達嶺～）→「西瓜隊」の異名、楊河から響水堡に至る時の強雨
張家口	張家口を一望できる西太平山	張家口の長城（石塊製）、張家口の語源、市街地の構造（下堡には小城あり）		ロシア人（露清銀行ほか）、洋務局での英語のやり取り（「此地は北辺第一の要害」と調査を答められる）	山西人が皮貨店その他店舗を営む、物流の拠点、両替（銅貨→制錢）	義成洋行（哲院）2期生石井氏、古橋氏、三井分（浦氏）	張家口～帰化城までのルート選択（察哈爾遊牧地を通過するルート）
張家口～帰化城	コンディションの悪い道路、秃山、ハンノルバの峻坂→「登りつくせば約五千尺の高原際なく漣なく続くなり」、波状高原、朔北の野（一面の牧草地帯、傾斜が非常に緩慢な山→変化のない風景）、「大牧場」と夜になると狼や鬼が出そうな山（ホルスタイン手前）	ハンノルバと鉄木真、オールドスに眠る鉄木真、荒れ果てた古真、カラコルム	「ハンノルバには人家三四散在」、蒙古犬、多くのモンゴルテント、喇嘛廟（ポールツエ）、支那人家六七テント三四近くに見ゆ、南京虫・野菜のない食事（以上マレンチユイ）、土俗（テント生活・羊肉や乳製品が中心の食生活・貫頭衣・単純快活で宗教心に富む性質・卓越した乗馬技術と悍猛さ）、喇嘛教（戦略的な優遇政策と相統者以外の出家→人口減・「ツールフル」（門付）が歌う「鉄木真への祈願」）	移住支那人による開墾と蒙古人の駆逐、キャラバン、ローマカトリック（ナホーチエンの教会と白人宣教師→支那語で対話、ルッテン氏作成の地図）、蒙古人がアヘンを吸飲（ホルスタイン）			寒気（激しい寒暖差）、烙餅、「竹の子先生」（マレンチユイほか）、美しい日の出と月、軍中泊を数度経験
帰化城	「北は陰山より南は殺虎口に至り西は目も遙かの鄂爾多斯砂漠に及ぶ大平原に五穀繁茂し樹林散在する」、「やがて城壁は見え初め樹の森の上に雅美なる喇嘛塔」（入城までの景観）	綏遠城（新城。帰化城より東北5 浬の位置にある）と帰化城（旧城）の簡単な紹介	「人皆何となく風雅、喇嘛教と活仏の概略	清真大寺のアラビア人2名より回教徒の事情などを説明してもらい、商人宿での交流（天津・庫倫・新疆などの商人、隊商が運んできた乾葡萄）	交通の要地、「上流の商人には天津人多く天津語は勢力を有す」、皮・織物工業、貧富の差小さく生活には便利		衙門、綏遠城と歩第一營の訪問、新式の教育を受けつつある八旗兵と護衛
帰化城～包頭鎮	「陰山々脈を北に黄河を南にせる大平原中を道は通じ付近は牧場農地相半し樹林も処々に散在する」	王昭君と青塚	オボ（その形状と巡礼の習慣・「旅客には好箇の目標」）	英語を話す洋服姿の土耳其斯坦（トルキスタン）人と支那人の従者（トシユホ）			晴天時の竜巻、朔北の「棒の如き」雨
包頭鎮	「陰山を背にし阿拉善を右にし左は以て王たるべき帰化城の平原を控え眼下には是れ万里天上より来る黄河の流あり」、オールドスの大砂漠、「鎮の位置高ければ水の供給少き」ため生ずる「住民の不便」、川幅は意外に狭い黄河	大きな城壁（「想ふに是れ甘肅の回教徒に備ふ」ため）	黄河の鯉料理と黄酒		南海子（「包頭鎮と甘肅との水運に依るの貿易を司る（中略）一小村」）	「天津の売菓商林君」	「九月とは云へ口外はべら棒に寒き一日の夕」、「王得勝將軍旗下の馬隊」の歓迎
帰化城～大同府	陰山の雪景色、「人烟稀なる草地に横はる一大湖」（「代哈泊畔」）	得勝口の長城（荒廢）、「東方の山上高く北魏の一帝陵を見る」（チンコリヨウ）	穴居（清潔で住み心地よい）	教会（「プロテスタントの在口外宣教師」、スウェーデン人宣教師3名とともに大同府へ入城	豊鎮は口外移民に物資を供給する要地として早くより発達		「雨後の寒気」、「漠南の寒」は「たまたまつたものにあらず」、撫民府のもてなし→老酒
大同府		極めて雄大な城壁、上・下華嚴寺、石窟寺	「文廟らしきもの、開帳」（雅美な風俗と善良時代を彷彿とさせる婦人のスタイル）	来日経験のある知府、教会堂（スウェーデン人宣教師がパイオリンとハンドオルガンで国歌を演奏）		塚本工学博士と通訳橋口氏	無礼な知果、歩隊の歌紙との往来
大同府～張家口	樹木の紅葉→悪路も苦にならず、レスの谷	「地上一面に天然曹達する陽高天鎮」					

（「晋蒙隊旅行記」「晋蒙隊旅行記（承前）」の記述より作成）



は書籍として刊行されたものだが、当該地域の占める分量は多くなく、内容も薄い。)も大きい。が、筆者の特性や性格が内容に反映され、同じ地域を巡ったものでも関心が異なっているという意味では、「大旅行」のダイジェスト版を読み込んでいく意義があるといえる。

今後の課題として、他の時期の書院生たちが挑

んだ内蒙古方面の「大旅行」の記録を読み進め、地域の変化を明らかにするとともに、「大旅行」のダイジェストだけではなく、提出が義務付けられた卒業論文や日誌、『支那省別全誌』の内容も確認しながら、この地域の特徴を明らかにしていきたい。

### [付記]

本論の執筆の機会を与えて下さった藤田佳久教授に感謝申し上げます。

### 注

- (1) 高木秀和 (2006) 「内蒙古で日本人学生は何を見たか —東亜同文書院第6期生が記録した内蒙古と現代の日本人学生が見聞した内モンゴル自治区について—」、『愛知大学東亜同文書院記念センター オープン・リサーチ・センター年報』創刊号、109—124 頁。
- (2) 藤田佳久 (2000) などによれば、第7期生以降は自分たちの手で調査ダイジェストが編まれるようになった。  
藤田佳久 (2000) 「東亜同文書院学生の中国調査旅行とコースについて」、『東亜同文書院 中国大調査旅行の研究』(愛知大学文学会叢書 V)、289 頁、大明堂。
- (3) 清国上海東亜同文書院、小笠原俊三・編 (1911) 『旅行記念誌』、総頁 462。  
オンデマンド版は、愛知大学 (2006) 『東亜同文書院大旅行誌 4 東亜同文書院編 旅行記念誌 第八期生』、総頁 462、雄松堂出版。
- (4) 米内山庸夫 (1955) 「第八期回想録」、滬友会・編『東亜同文書院大学史』、184—188 頁。
- (5) 滬友会・編 (1982) 「第八期生回想録 総髪と辮髪と」、『東亜同文書院大学史 —創立八十周年記念誌—』、422—425 頁。  
なお、この回想録は前掲 4 の内容に加筆・修正を加えたものである。
- (6) 前掲 5。
- (7) 前掲 4。
- (8) 前掲 3、凡例。
- (9) 前掲 3、序。
- (10) 前掲 5。
- (11) 前掲 4。
- (12) 前掲 4。
- (13) 前掲 4。
- (14) 前掲 5。
- (15) 前掲 3、奥付。
- (16) 前掲 1、120 頁。
- (17) 前掲 1、123 頁。